

2024年7月28日に全国障害者問題研究会（全
障研）新潟支部主催連続講座第3回「新潟県後期中
等教育（高等部）の希望者全入のとりくみ、「医療的

ケア児」の教育保障、胎児性水俣病」から」が開催
されました。その内容を竹内光男さんの了解を得て、
編集部でまとめました。

発達保障への道を求めて 自分の歩み・学びを通して（第二回）

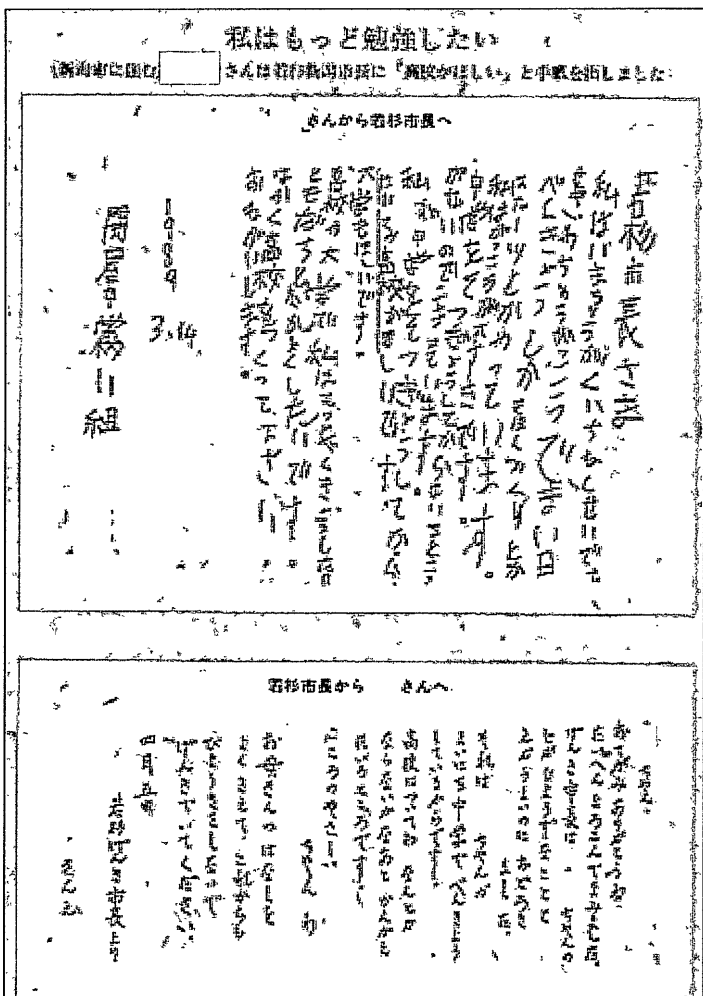
竹内 光男

1982年、「国鉄が分割民営化になる前、それを
止めたい国鉄職員と障害者そして支援する市民たちが、
障害者の旅行をしたいという希望を実現しようと、
「ひまわり号を走らせる会」という大きな市民運動が
起きました。新潟でも会が作られ、ひまわり号が走り
ました。

その運動の後、会の人たちが今度は、「自分たちが
日常的に生活し話し合える場所が欲しい」という運動
を始めました。市の障害福祉課から「昼間のグルー

プを立ち上げるのはいかがですか」という話がありまし
た。当時、しろやま作業所という「福祉作業所」があ
りました。そこで、その弟分として、日中の生活だけ
じゃなくて「働きたい」という要求にも応えようと立
ち上げたのが「さんろーど」です。

ところが、一方では高等部の知的障害者の進路がな
かなか保障されない状況でした。それを保障する運動
を親御さんの中から立ち上げていきたいと誕生したの
が、新潟県「高等部・後期中等教育希望者全入」の運



かりになりました。

彼女は高等部を卒業した後、宮城にある専攻科を卒業しました。さらに2年間で、そこへも進学をしました。

若杉市長さんへの手紙に市長から返事がもらえました。もらったときは非常にうれしかった。しかし、希望者全入への道のりはさらに厳しかったのです。

希望者全員が新潟

動でした。

1989年「私はもっと勉強したい」という若杉市長への手紙を書いた関屋中学に通っていましたMさん。彼女が若杉市長に手紙を出したのが大きな運動の足が

県で実現できたのは、それから10年後。その道のりをお話ししたいと思います。

1989年6月18日に、「新潟県障害児の後期中等教育（高等部）の保障をすすめる会」が結成をされま

した。

それまで1980年代の前半には試験的に高田養護学校に高等部が作られました。ほんの一步前進という感じですが、そこは職業自立が中心の、職業教育をする高等部でした。カリキュラムを見ると体育と職業実習が中心です。まさに職業自立一本やりの中身(カリキュラム・教育課程)です。

社会復帰の見込みがある人、養護学校の中学部を卒業して、しかも高等部に行った場合、将来的にはなんとか就職できそうだという人が高等部に進学できるのでした。定員は十名。

この当時有名な言葉に「足切り四原則」というのが高等部の入学選考にありました。①一人通学が可能である。②身辺自立ができている。③就職可能である。④高等部の教育課程履修可能である等です。

「履修可能である者しか入れない」ということは一人通学ができない人はまずだめ。身辺自立、自分でトイレに行つて帰つてきちんとできる人でないと入れない。将来は就職できるだろうと思われなくともすため。それと⑤中学部卒業者のみということですので、一般のその当時の言葉でいうと特殊学級を卒業する人たち

はまず入れない。

そういう足切り四原則と言うけど、中身は足きり五原則がまかりとおつていた時代でした。なぜそうなったのか。それは当時の医師出身の君健男県知事が、「この精薄の人たちは教育に馴染まない」教育しないでもいいだろう。こういう基本的な考えを持った人で、障害児教育に対してはいたつて消極的で、しかも知的障害の子どもたちにはまず必要ないという、そういう医者であるがゆえに教育不必要論というところでもない発想の持ち主だったからです。それが障害児教育の面にも貫徹されていきました。

しかし、発達は遅れているがゆえにもつと学びたい、さらに学びたい、大学まで行きたいというMさんだけではない障害者本人たちの願いと、それを実現するために早く高校をつくつてくたさいという、当時としては障害児学級の親御さんたちとその仲間たちの中から、「後期中等教育、高等部の保障をすすめる会」(以下「すすめる会」)設立の声が上がり始めました。

当時、全国的な流れは中学部を卒業してからも高校までは保障して行こうでした。全国的な進学率、1988年度状況を見ると新潟が高等部の設置率が全国

最下位14・3%全国平均は61・3%ですから、それから見ても極端に少なかった。非常に厳しいスタートでした。

僕は最初、埼玉に赴任しました。高等部に進学するのは埼玉では当たり前でした。新潟に来たらとんでもない話で、だいたい高等部がないし、進学なんかほとんどできない、そういう実態がありました。

そこで親御さんたちと、いろいろ学習し要求運動を展開しました。

掲げた要求の中身のひとつは、高等部の設置を全国並みに引きあげて、高等部入学の条件にある足切り四原則をやめてくれました。

さらに、ここは素晴らしいことだと思うのですけれども、重症の子どもたちがいる高等部の設置を。訪問教育を受けている子どもたちにも教育を保障する高等部の設置を。この2つがこの「すすめる会」の大きな目標になりました。

そこで早速請願運動に取り組みました。古町十字路、各養護学校のある場所、上越、三条、新発田、村上、佐渡と県内各地に親御さんたちが署名運動に立ち上がりました。

あるお母さんが、初めて古町十字路の署名運動に参加したときです。ちょうど寒い時期で、バタバタ通行者は走り去って行くなかで、署名はそう簡単にはしてもらえない。そんな厳しい中で、ついに泣き出してしまったことがあります。

非常に厳しい中ででしたけれども、最初に集めたのが45073筆。これは新潟の障害児教育運動史上初めてのことです。よく集めたという感じです。

知事、県議会、教育庁へ署名を提出しました。代表の高橋達泰さんが口頭陳述しました。総務文教委員会で毎回質問意見を述べて頂いた共産党の県会議員をはじめ、多くの議員の協力も得て、請願を採択してもらうことが出来ました。これが第一回目でした。

三条、上越、村上では、PTAを通して請願署名に取り組んでいただきました。三条でも街頭署名をやりました。

第二回目は訪問教育の代表の福山さんがやりました。「すすめる会」の請願署名もさることながら、さらに訪問教育の親御さんたちも会をつくって独自に署名運動をたちあげて、全体で47168筆を集めました。そういう経過の中で高等部の設置の運動がどんどん進

んでいきました。

さらに、県民世論を盛り上げなければいけないということで、テレビや新潟日報でもどんどん声を載せてもらいました。県議会への陳情や交渉をやってくれたところをT e N Y が放送して応援していただきました。アナウンサーが直接取材に来て応援してくれました。

新聞への意見広告というのもありました。兵庫県の中で始まった「ヒューマンボイス運動」。新潟でもやろうと、一口500円で「花開け15の春ヒューマンボイス」運動を高橋達泰さんが代表になって呼びかけ、新潟日報に12月の8日と14日の2回、意見広告を載せました。これもいままでやったことのないことでした。

高等部の条件整備の運動をやりながら、もう一方、他県ではどういう教育をしているのか、親御さんたちにわかってもらおうと他県の高等部を見学することを企画しました。僕が最初お世話になった埼玉県川口養護学校、ここは障害の重い子どもたちを宝として高等部まで保障していくという学校でした。ここの教育課程、どういう教育をやっているのかを実際に親御さんたちと見学に行きました。

また、大宮市や大津の市立養護学校の高等部も親御

さんたちは独自に見学しています。親御さんたちが積極的にこの運動を担ってきたというすごい面も歴史的にありました。

見学に学びながらも実際に中学部、特殊学級を卒業する人たちが進学できない状況は続いています。そこで高等部の教育を実践してみようということをやり始めました。退職教師、現役の教員がボランティアで参加しました。二葉中学校の木島先生に校長先生になつてもらい、多くの先生からいろいろ応援してもらいました。これもマスコミがとり上げていただき大きな力になりました。この取り組みは、三年ぐらい継続しました。

また「花ひらく15の春」という小さなパンフレットを作って親御さんたちの学習も重ねていきました。

例えば、高等部の企業内で黙々と従順に働けるように「愛される障害者」を目指して、体力作りマラソンと忍耐力を養う決まった作業、作業学習を中心にする実践に対しても考えてもらう。教科学習も位置づけた青年期教育を高等部のイメージに持ってもらおう。

こうした運動の中で、市立養護学校の親御さんたちですが、アンケートの中で、進学させたいが、90%と

徐々に超えてきたのです。特殊学級の親御さんたちは72%だったのですけれども、まだまだ高等部へのイメージが掴めない面もありますけれども、養護学校の人たちはぜひ進学させたいという、高等部へ進学させたいという願いが浸透してきました。

全国障害者問題研究会の青年期教育、「青年期教育全国研究集会」が行われて、1990年のはじめ前後からありました。その青年期教育全国研究集会を新潟でやろうと、親御さんたちが非常に張り切つて準備し、第11回障害者青年期教育全国研究集会新潟大会を1999年6月26・27日とやることになりました。350人ほどの参加で大成功でした。新潟からも約半分くらい150人前後の参加がありました。

前年にプレ集会を100名で成功させていました。プレ集会というのは、実際に分科会を設けるだけでなくて、この青年期教育の全国的な流れを確認して、新潟が現在どの位置に来ているのか、さらに希望者全人まで持つて行くには、どうしたらいいのかということを学びながらプレ集会を開いてきました。

今、全障研新潟支部の学習会で100名参加は厳しい数です。その当時はそれだけ親御さんたちの願いが

強く何とかしたいというその思いも大きかったのだと思います。

大会では生活指導、労働等々の分科会が6つほど作られ、司会、運営等をみんなで担いました。

高等部がないときは、中学部あるいは中学校の特殊学級は将来卒業したら、就職という方向に流れていったが、高等部ができることで、中学部、特殊学級の教育の中身が、きちんと学ぶという方向で、教科を位置づけるように大きく変わってきたと思うのですけれども、教育課程の自主編成も大きく変わっていきました。だから高等部は、小中の教育内容をも左右しているという、そういう中身だったと言うことを改めて感じています。

卒業後の進路保障として、18歳以降も学びの場を作つて欲しいという要求を、さらに発展させていくことになりました。

今全国的には、高等部を卒業したあと、専攻科等、進路が開かれつつあります。前に紹介したように、仙台の専攻科だけじゃなくて、三重とかあるいは国立でも鳥取大学の付属専攻科が公立として初めてつくられました。茨城、東京、新潟にも作られています。

最近初めて知ったのですが「さんろーど」に実習を受け入れる中で「あれ、この学校聞いたことないなあ」という学校があったので尋ねてみたら、職業自立の一環としての専攻科が認可され、運営が実際スタートルトしているのです。親御さんたちはやっぱり教育年限を伸ばしてほしい願いがあるのです。高等部でおわりということではないということです。

ちなみに高等部の運動をしている中で、大学の先生方にも、ぜひ運動に協力をして応援して欲しいということで行った時に、ある教授からもらった資料から、ドイツでは25歳まで、いわゆる知的障害の青年に教育保障が当たり前のようになりつつあるということを知ることができました。

だから教育年限を伸ばすという学びの場を広めていくということは発達の遅れ、知的障害があるが故に長く豊かにそういう教育保障が大事なんだということを、私自身が念頭におかないと駄目だなと、そんなふうに思っています。改めてこのことを皆さんにも伝えておきたいと思います。(続く)

(たけうち みつお・NPO法人『障害者の生活ストーリー』理事長)

『モヤモヤ解消法』

夏目漱石の『吾輩は猫である』の冒頭文は、世上知られているように「吾輩は猫である。名前はまだない。」である。書き出しの文章を読んだだけで、その本にのめり込むことがある。

愛読した吉村昭の『長英逃亡(上)』は「天保十五年(一八四四)六月中旬、江戸大伝馬塩町の家並みには、暑熱がよどんでいた。」ではじまり、『破獄』は「昭和十八年四月十日、東京市と近郊の桜は満開になった。」「漂流」は「高知市から東に二十キロ近く進むと、右手に太平洋のひろがりが見える。」が書き出しの文である(いずれも新潮文庫)。

気がふさいだり、思いが屈したりしたときには、過去に読んだ好きな小説のページをアトランダムにめくることがある。

「長英は、眼をかがやかせて洋書のページを繰った。胸につかえていたものが、一時に噴き出すような感情のたかぶりを感じた。」という文章に遭遇したこともいい思い出だ。ただそれだけで気分転換になった。

(小野塚)